



下商物語 (その五九)

下商百三十年の歩み

教諭 林 俊行

江戸時代に、当地赤間関は「西の浪華」と謳われ、大阪以西では最も経済的に繁栄を極めた港町でした。特に、「北前船」による全国各地の物産取引は赤間関の経済の中核をなしていました。しかし、明治維新以来の産業構造の変化や内陸交通の発展などにより、古い時代の経済構造の下で繁栄していた赤間関の経済に大きな打撃を与えることになり、そのような現状を打破し、近代化への道を求めることが急務となり、赤間関再生のための活路の一つとして「商業学校

の設立」が地元有志の手によって成し遂げられたのです。明治十七(一八八四)年十月十八日に地元商業の關係者を始め一般市民の近代化への熱い思いと大きな期待を担って創立の日を迎えました。つまり、本校開校当時は当地の伝統を引き継ぐ商人は、工業の振興・発展期を控えて伝統的な農業を除いて最大の産業の担い手で、未知なるものにチャレンジする自主・独立の精神を持った商業の経営者の育成が急務であったのです。明治の時代を迎えて積極的に未来を切り拓き急速に変動する時代に対処し得る商業経営者の養成を指して設立された新しい商業教育のための商業教育養成機関であり、我が国で近代的商業教育を行う商業学校が法的に始めて設立できる

ための「商業学校通則」が制定された年でもありました。

開校の地は、西之端(現在の田中精代記念館辺り)で旧毛利藩時代の目代所(代官所)の建物を校舎として開校)で、赤間関区二三ヶ町連合会立で認可を受け、初年度の入学定員は、三十名で最初の入学生は二十八名でしたがその後八名が入学して合計三十六名となりました。初代の(赤間関商業講習所)所長は、慶応義塾出身で福澤諭吉先生の従兄弟にあたる中村英吉先生で福澤諭吉の教えでもある「独立自尊」の考えを強く受け継いで就任され、大変講演を得意とされておられた方のように感じました。参考までに彼の影響で、本校初の部活動は明治三十年誕生の講演部で、その翌年に野球部などが誕生したのです。ところが、その校地は手狭で明治二十四年二月には、入江町へと校舎が移転(現在の王江小学校辺り)しました。海峡を望む風光明媚な高台に位置し

ており、船舶の移動も手に取るように見ることのできた場所でした。ところが、当時の下関駅の建築上事のためやむなく明治三十五年三月に名池山校舎(現在の名陵中学校辺り)へと移転しました。ここでは、大正十一年の原因不明の火災による影響で現在の千畳原へと移転するまで四半世紀をすごすことになりましたが、この期は斎藤軍八郎(艦の銅像が管理棟一階の会議室前方に)名物校長が就任され約二十年間学校長の要職を担当され飛躍的な発展をみたときでもあります。この時代は当地が赤間関市から下関市へと市名が変更され本校の校名が略して「下商」と言われ親しみを帯びて呼ばれることになりました。

参考までに、開校時から大正の始め頃にかけて来校された著名人には、井上馨(明治十七年)、森有礼(明治二十年)、山県有朋(明治三十五年)、高田早苗(明治四十三年)、大隈重信(大正二年)、洪沢栄一(大正三年)などの著名人の方々がおいでになり講演されておられるようです。いかに本校が注目されていたかが伺い知れることだと思えます。

千畳原校舎の最初の時代は、昭和の始まりから日中戦争勃発以来、学校教育が軍事化される中で極めて特異な体験を強いられました。終戦後は昭和二十一年十一月三日に民主主義・平和主義を理念とする「日本国憲法」が公布され思想及び良心の自由・学問の自由などの「精神の自由」が尊重されると同時に教育を受ける権利と義務が規程されるなど画期的な時代を迎え、昭和二十三年四月には「六・三・三」制となって新制高校として「下関商業高等学校」が発足しました。翌年の二十四から二十五年にかけて高校統廃合(県下の六十七校が四十九校に)が行われ、本校は中国地方で唯一の単独商業高校として存続することができたのです。以降、平成6年から全日制は初の小学科制(商業科と情報処理科)を導入し今日に至ります。校舎の環境面では、創立百周年(昭和五十九年)の大事業を迎えて新校舎となり、サブグランド(平成二年)や図書館(平成六年)や講堂(平成二十五年)には新しく生まれ変わら環境整備の充実が進んだのです。この間、実に二万八千五百名を超える卒業生を数え多くの方々が社会で活躍されておられます。今年、めでたく創立百三十年を迎えたので、創立百周年以降の記念の年表も作成してみましたのでご覧下さい。

ており、船舶の移動も手に取るように見ることのできた場所でした。ところが、当時の下関駅の建築上事のためやむなく明治三十五年三月に名池山校舎(現在の名陵中学校辺り)へと移転しました。ここでは、大正十一年の原因不明の火災による影響で現在の千畳原へと移転するまで四半世紀をすごすことになりましたが、この期は斎藤軍八郎(艦の銅像が管理棟一階の会議室前方に)名物校長が就任され約二十年間学校長の要職を担当され飛躍的な発展をみたときでもあります。この時代は当地が赤間関市から下関市へと市名が変更され本校の校名が略して「下商」と言われ親しみを帯びて呼ばれることになりました。